

総 説

甘草と炙甘草の修治について：本草書からの考察

戸田 静男

関西医療大学 基礎医学ユニット

要 旨

甘草は、和漢生薬として多くの漢方方剤に含有されている。そこで用いられている甘草には、生の（加工していない）甘草（通常、甘草ともよばれる）と修治（加工している）している甘草がある。修治している甘草の一つとして、炙った甘草（炙甘草）がある。

第十七改正日本薬局方において、甘草は「カンゾウ *Glycyrrhiza* GLYCYRRHIZAE RADIX」[*Glycyrrhiza uralensis* Fisher 又は *Glycyrrhiza glabra* Linne (Leguminosae) の根茎及びストロンで、ときには周皮を除いたもの（皮去りカンゾウ）である]、炙甘草は「シャカンゾウ Prepared *Glycyrrhiza* GLYCYRRHIZAE RADIX PRAEPARATA 炙甘草」[本品はカンゾウを煎ったものである]と記されている。

漢方の基本的古医書である『傷寒論』に記載されている甘草含有方剤70処方のうち甘草は甘草湯と桔梗湯の2処方だけに含まれて、そのほかの甘草含有方剤には炙甘草が含まれている。このようなことから、甘草と炙甘草の性状や薬能がどのように違うのかを検討していくことは重要といえる。

本研究では、このことについて歴代の本草書における甘草と炙甘草の修治の記載を検索、考察していき、その意義について検討した。その結果、中国書では甘草は心火や熱火を瀉す作用のある瀉剤であり、炙甘草は脾胃の不足や三焦の元気を補う補剤であることが記されていた。また、炙甘草には表裏不調和を調和し中気不足を緩和することで諸薬を調和する薬能のあることも記されていた。日本の江戸時代初期までの後世方派の本草書では、中国の歴代の概念が踏襲されていた。しかし、江戸時代中期の古方派の香川修庵や吉益東洞はそのようなことは考慮に入れるべきでないと否定した。これに対して、江戸時代後期の小野蘭山はこのような行き過ぎであると是正した。このように、日本では江戸時代中期より甘草と炙甘草の修治について論議されていた。今回の考察から、甘草と炙甘草は多くの漢方方剤に用いられている生薬であることから、修治の意義の大きいことが示唆された。

キーワード：甘草、炙甘草、修治、本草書

1. 緒 言

甘草は、和漢生薬として多くの漢方方剤に含まれている。たとえば、現在の一般用漢方製剤では334処方中203処方（61%）に含まれている¹⁾。また、漢方の基本的古医書である『傷寒論』では113処方中70処方（63%）に含まれている²⁾。このようなことから、甘草は最も一般的にして重要な和漢生薬の一つといえる。漢方方剤に用いられている甘草には、生の（加工していない）甘草（通常、甘草ともよばれる）と修治（加工している）している甘草がある。修治している甘草の一つとして、炙った甘草（炙甘草）がある。

第十七改正日本薬局方において、甘草は「カン

ゾウ *Glycyrrhiza* GLYCYRRHIZAE RADIX」[*Glycyrrhiza uralensis* Fisher 又は *Glycyrrhiza glabra* Linne (Leguminosae) の根茎及びストロンで、ときには周皮を除いたもの（皮去りカンゾウ）である]、炙甘草は「シャカンゾウ Prepared *Glycyrrhiza* GLYCYRRHIZAE RADIX PRAEPARATA 炙甘草」[本品はカンゾウを煎ったものである]と記されている。第十七改正日本薬局方では、甘草と炙甘草とも定量したときに「換算した生薬の乾燥物に対し、グリチルリチン酸 (*glycyrrhizinic acid* :C₄₂H₆₂O₁₆:822.93) 2.0% 以上を含む」と記されている。これらの「生薬の性状」では、甘草は「ほぼ円柱形を呈し、径0.5～3cm、長さ1cm以上に及ぶ、外面は暗褐色～赤褐色で縦じわがあり、しばし

ば皮眼、小芽及びり片葉を付ける。周皮を除いたものは外面が淡黄色で線維性である。横切面では、皮部と木部の境界がほぼ明らかで、放射状の構造を現し、しばしば放射状に裂け目がある。ストロンに基づくものでは髄を認めるが、根に基づくものではこれを認めない。本品は弱いにおいがあり、味は甘い」、炙甘草は「通例、切断したもので、外面は暗褐色～赤褐色で縦じわがあり、断面は褐色～淡黄色で線維性である。横切面は、皮部と木部の境界がほぼ明らかで、放射状の構造を呈し、しばしば放射状に裂け目がある。」「本品は香ばしいにおいがあり、味は甘く、後にややにがい。」と記されている³⁾。

『傷寒論』に記載されている甘草含有方剤70処方のうち、甘草は甘草湯と桔梗湯の2処方だけに含まれ、そのほかの甘草含有方剤には炙甘草が含まれている²⁾。このようなことから、甘草と炙甘草の性状や薬能がどのように違うのかを検討していくことは重要といえる。

本研究では、このことについて歴代の主要な本草書における甘草と炙甘草の修治の記載を検索、考察していき、その意義について検討した。

2. 方法

本研究では、長濱善夫の『東洋医学概説』を参考にして⁴⁾、主要で入手可能であった中国および日本の本草書を対象とした。

中国書では、『神農本草経』(BC31～AC220)⁵⁾、『傷寒論』(200～210)²⁾、『湯液本草』(1289、王好古)⁶⁾、『本草蒙筌』(1565、陳嘉謨)⁷⁾、『本草綱目』(1578、李時珍)⁸⁾、『本草述』(1666、劉若金)⁹⁾、『本草備要』(1694、汪昂)¹⁰⁾、『本草蓬原』(1695、張璐)¹¹⁾、『本草從新』(1751、吳儀洛)¹²⁾、『本草求真』(1769、黃宮綉)¹³⁾である。

日本書では、『薬性能毒』(1608、曲直瀬道三、玄朔)¹⁴⁾、『和語本草綱目』(1716、岡本一抱)¹⁵⁾、『増補片玉六八本草』(1723、加藤謙斎)¹⁶⁾、『一本堂薬選』(1729、

香川修庵)¹⁷⁾、『薬徴』(1771、吉益東洞)¹⁸⁾、『本草綱目啓蒙』(1803、小野蘭山)¹⁹⁾である。

表1は、今回用いた本草書を年代順に列記したものである。ほぼ、主要な本草書が網羅されているといえよう。(表1)

これらの書籍から、本研究に関係する段落を抽出し結果に提示した。それら段落の修治に関する部分を下線で明示した。また、漢文はその現代語訳し付記した。

3. 結果

(1) 中国の本草書

甘草は、最古の本草書といわれている『神農本草経』(BC31～AC220)では、以下のように記載されている⁵⁾。

「甘草、味甘平。生川谷。治五臟六府寒熱邪氣。堅筋骨。長肌肉倍力。金創。解毒。久服輕身延年。」(甘草は、甘く平である。五臟六府の寒熱邪氣を治し、筋骨を堅くし、肌肉の力をつけ、創傷の治療、解毒作用がある。長期服用すると体が軽くなり、寿命が延びる。)

甘草は、『神農本草経』の上品に記載されており、緩和で様々な治療効果が期待できる生薬であると示唆される。これには、甘草の性状や薬能について記載されているが、修治の記載はない。

元代の『湯液本草』(1289、王好古)では、『神農本草経』のような知見を取り上げて、生で用いる場合と炙って用いる場合の作用の相違を記載している⁶⁾。

「象云生用大瀉熱火炙之則温能補上焦中焦下焦元氣和諸藥相協而不争性緩善解諸急故名國老去皮用甘草稍子生用為君去莖中痛或加苦練酒煮玄胡索為上尤妙」(生で用いれば熱火を瀉し、これを炙れば上焦中焦下焦を元気にして補すことができる。諸薬を和して相乗効果をしめす。)

ここでは、生の甘草は瀉剤として、炙甘草は補剤として用いられることが記されている。

表1 本研究で対象とした本草書

中国			日本		
書名	成立年代	編著者	書名	成立年代	編著者
神農本草経	BC31-AC220	著者不詳	薬性能毒	1608	曲直瀬道三、玄朔
湯液本草	1289	王好古	和語本草綱目	1716	岡本一抱
本草綱目	1578	李時珍	増補片玉六八本草	1723	加藤謙斎
本草蒙筌	1565	陳嘉謨	一本堂薬選	1729	香川修庵
本草述	1666	劉若金	薬徴	1771	吉益東洞
本草蓬原	1695	張璐	本草綱目啓蒙	1803	小野蘭山
本草備要	1694	汪昂			
本草從新	1751	吳儀洛			
本草求真	1769	黃宮綉			

明代の『本草蒙筌』（1565、陳嘉謨）では、生の甘草は寒であり炙甘草は温であるから、生の甘草は火を瀉す作用、炙甘草は中に温める作用がある、と述べている⁷⁾。

「味甘。平。生寒炙温可升可降。陰中陽也。無毒。生瀉火。炙温中。」（生は寒、炙は温で、升したり降ろしたりすることができる。生は火を瀉し、炙は中に温める。）これらのことは、『湯液本草』の「生の甘草は瀉劑、炙甘草は補劑」の記述を裏付ける薬能を示したものと思われる。

明代の『本草綱目』（1578、李時珍）では、方書では甘草は炙って用いる、と述べている⁸⁾。炙る方法は、「流水で蒸して炙り、漿水を用いて炙って熱する。刻んで赤皮を去る。」と記されている。

「根（修治）雷斅曰 凡使須去頭尾尖處。其頭尾人。每用切長三寸。製作六七片入甕器中盛。用酒浸蒸。從己至午。取出暴乾。割細用。一法。每斤用酥七兩塗炙。酥尽為度。又法。先炮令内外赤黃用。時珍曰 方書炙甘草皆用流水蒸炙之。至熱。刮去赤皮。或用漿水炙熟者。大抵補中宜炙用。瀉火宜生用。」（方書では、炙甘草である。皆流水を用いて蒸し、これを炙る。刻んで赤皮を去る。あるいは、漿水を用いて炙り熱する。大抵は中に補すときは炙り、火を瀉す時は生を用いる。）

ここでも、生の甘草は瀉劑として、炙甘草は補劑として用いられることが記されている。

清代の『本草述』（1666、劉若金）では、甘草を炙るというのは、甘温にするためである、と述べている。その甘温の作用が、陽の不足を解消する。そのことで、甘草は諸薬を和して中にする、と論じている。修治の項目で「寸径が大きく結緊で横断紋のあるものが良質である」と記されているように、甘草の品質が述べられている。炙る方法は、『本草綱目』と同様の前処理が記されている⁹⁾。

愚按薬味之甘者多矣。乃兹種獨以甘段擅名。益別録謂其為九土之精。能治七十二種乳石毒。解一千二百般草木毒調和諸薬有功也。是瀨湖所謂贊帝力而人不知斂神功而已不興者乎。是一和足以聚衆矣。弗就和之中其功有緩而緩而之中其功又瀉就緩瀉之中其功更有補也。如東垣所云。脾胃不足而心火乘脾。火性苦急。頼此緩之。此火非可以苦寒瀉。即以甘平而和緩者瀉之。一炙則為甘温。即以甘温陽之不足矣。此甘草於和諸薬中。而先哲洗發其專功又有如是也。抑脾胃不足。何以心火乘脾乎。益後天陽氣之原出於胃。雖土以火為。更以土為化原。脾胃虛。則心火

之化原竭。故母反索救於子以乘脾也。心火乘脾。陽不能生陰而反屬陰。故甘温能緩正氣即以養陰。是又可通於養心血之義也。（一に、炙は甘温となし、すなわち、陽の不足を甘温するを以てす。此れ、甘草諸薬を和すに於いて中す。）

修治 以大径寸而結緊横有断紋者佳炙者用長流水蘸淫炙之至熟刮去赤皮（径寸大、結緊横断紋あるものは佳なり。炙るものは、長流水を用いて燻す。これを炙には、赤皮を去り刻んで熱する。）

以上のように、炙ることの意義と、甘草含有方剤における炙甘草の存在意義が記されている。

清代の『本草蓬原』（1695、張璐）では、生を用いるということは、気平にすることである。脾虚熱大は心火を瀉す、ということであると述べている。炙るということは、気温にすることで、三焦の元気を補し臟腑の寒熱を治し、表邪を散らすことである。また、炙甘草湯が動悸息切れに有効であることも、記されている¹⁰⁾。

發明 甘草氣薄味厚升降陰陽。大緩諸火。生用則氣平。脾虚熱大瀉心火。解離腫金爭瘡諸毒炙之則氣温補三焦元氣治藏府寒熱而散表邪。去咽痛緩正氣養陰血。長肌肉。堅金骨。能和衝脈之逆緩帶脈之急。凡心火乘脾腹中急痛腹皮急縮者。宜倍用之。其性能緩急。而又協和諸薬。故熱薬用之緩其熱寒。薬用之緩其寒熱相兼者之得其平。本經治藏府寒熱邪氣総不可調和氣義。仲景附子理中用甘草。恐僭上也。調胃承氣用甘草。恐速下也。皆緩之之意。小柴胡有黄芩之寒。人參半夏之温而用甘草則有調和之意。炙甘草湯治傷寒脈結代心動悸渾。是表裏津血不調故用甘草以和諸薬之性而復其脈深得攻補兼該之妙用惟土実脹滿者禁用而脾虚脹滿者必用益脾温則健運也。（生用いるは、気平なり。脾虚熱において心火を瀉す。これを炙るは、気温にして三焦の元気を補し藏府寒熱を治し、表邪を散す。）（炙甘草湯は、傷寒で脈結代で心動悸渾を治す。これ表裏不調故に甘草の諸薬和するの性を以て用いる。）

心火や寒熱などはそれまでの歴代の医書には対象とされていなかったが、ここで新たに導入された概念であろう。『本草述』でも炙甘草の甘草含有方剤における存在意義が述べられている。ここでも炙甘草湯を取り上げて、炙甘草が諸薬の作用を調和するという存在意義が論述されている。

清代の『本草備要』（1694、汪昂）でも、補中には炙を用いて、瀉火には生を用いると述べている。生を用いれば気を平にして脾胃の不足を補し心を瀉し、炙を用い

れば気温で三焦の元気を補し表寒を散らす、と述べている¹¹⁾。

大而結者良補中灸用瀉火生用達莖中用稍

味甘生用氣平補脾胃不足而瀉心灸用氣溫補三焦元氣而散表寒入和劑則補益入汗劑則解肌。入和劑則瀉邪熱入峻劑則緩正氣入潤劑則養血能協和諸藥使之不爭生肌止痛。通行十二經鮮百藥毒故有國老之稱中痛症忌之。(補中には灸を用い、瀉火には生を用いる。)(味甘にして、生を用いれば氣を平にして脾胃の不足を補し而して心を瀉し、灸を用いれば気温で三焦の元気を補し表寒を散らす。)

ここでは、氣平、気温、三焦元氣など氣に対する生あるいは炙甘草がどのような作用があるのか、論述している。このことは、それまでに論じられていない新発見といえよう。

清代の『本草從新』(1751、呉儀洛)でも、『本草蓬原』とほぼ同様のことが述べられている。

そして、補中は灸を用い大きいものを用いて、瀉火は生を用い細いものを用いると述べ、甘草の大きさで目標が異なるとしている¹²⁾。

味甘生用氣平補脾胃不足而瀉心火。灸用氣溫補三焦元氣而散表寒入和劑則補益入汗劑則解肌。入涼劑則瀉邪熱入峻劑則緩正氣。入潤劑則養陰血能協和諸藥使之不爭生肌止痛。通行十二經。解百藥毒療諸癰腫瘡傷。細者名統草補中灸用宜大者瀉火生用宜細者(味は甘なり。生用いるは、氣平なり。脾胃の不足を補い、心火を瀉す。灸を用いるは、気温にして三焦の元気を補し表寒を散す。)(細の者は統草と名く。補中は灸って大のものを用いる。瀉火は生で細のものを用いる。)

このように、目標とする作用によって甘草の修治の有無や形状を考慮する必要があると述べている。

清代の『本草求真』(1769、黃宮綉)では、生の性質は寒で瀉の作用があり、灸の性質は脾を補す作用があると記している。そのようなことから、方剤における含有生薬の副作用が生じないようにしている、と述べている¹³⁾。

味甘性質中外赤肉黃性生寒熱昔人言灸其用有火能瀉是因火性補急迫用此甘味以緩火勢且取生用性寒以瀉熨熨害耳至書有云灸用補脾是能緩其中氣不足調和諸藥不爭故入和劑則補益入涼劑則瀉熱入汗劑則解肌入峻劑則緩正氣入潤劑則養血并能解諸藥毒(生を用いるは性寒あることから瀉を以てする。)(灸を用いるは脾を補を以てする。これ、その中氣不足を緩め、諸薬を調和し争わざるとする。)

甘草が諸薬を調和する薬能のあることは、『神農本草経』以来伝承されてきた。ここで述べられているように、複数の生薬を含有する漢方方剤における甘草の意義は、複合による副作用のような有害事象を解消することであると思われる。

(2) 日本の本草書

日本の本草書では、以下のものであった。後世方の代表的本草書である安土桃山時代の『薬性能毒』(1608、曲直瀬道三、玄朔)では、修治について「外皮を去って刻む、脾胃を調べて中気を補うときには炙る。それは、微温で大変甘い。大きく肥大して太くて堅いものを粉草という。これは、薬に用いてよい。」と述べている¹⁴⁾。

修治 アラ皮ヲ去テ刻ム又脾胃ヲ調べ中氣ヲ補ナウ時ハ炙ル微温ナリ味尤モ甘ク大ニ肥エテ太ク堅キモノヲ粉草ト名ク薬ニ用テ佳也

能 甘草ヲ生ニテ用ユレバ氣平シテ脾胃ノ不足ヲ補ヒ大ニ心火ヲ瀉ス灸用ユレバ気温ニシテ三焦ノ元氣ヲ補ヒ邪熱ヲ去表寒ヲ散ズ

薬能については、「生で用いれば氣平にして脾胃の不足を補い大いに心火を、灸って用いれば気温にして三焦の元気を補い邪熱を去って表寒を散らす。」と記している。

これらは、その当時の中国の本草書を参考にした記載である。ただ、その中で甘草の品質についても述べられていることは、興味深い。

江戸時代中期の『和語本草綱目』(1716、岡本一抱)では、以下のように同様のことが述べられている。そして、必ず皮を取り去るように、さもないと毒性があると記している¹⁵⁾。

甘草ハ太ニシテ皮ウスク色黄ニシテ堅実ナルヲ粉草ト名ク甘草ノ極上ナリ。薬ニ入りテ功力強シ細シテ堅実ナルハ中品軽虚ニシテ或蛙或朽色或黒色ニシテ皮厚ク或皮麤物ハ下品ナリ。皆功用甚悪シ。薬ヲ入ラズ凡甘草ヲ使ニハ大粉草ヲ碎キ鹿皮ヲ去リ蘆頭ノ尾サキコトヲ功捨テ刻ミ灸用ユ或生ヲ用ユ方ニ依ルベシ甘草ノ蘆頭ノ尾ハ人ヲシテ吐逆セシム。必ノ去リ用ベシ。雷曰。凡ソ使フ須ク頭尾ノ尖處ヲ去ルベシ。ソノ頭尾ハ人ヲ吐クト。今ノ医家人參ノ頭尾吐ヲ致スコトヲ知りテ之ヲ去ル。凡ソハ甘草ノ頭尾吐ヲ致スノ義ヲ忘トシテ多クハ去ルコトナシ。

これは、李時珍の『本草綱目』の和訳本である。参照すべき箇所を抽出して記述していることは、単なる和

訳ではなく岡本一抱の意趣が入っていることで、意義がある。

江戸時代中期の『片玉六八本草』（1723、加藤謙齋）でも、皮を去って炙ったり、あるいは酒に浸けて炙ったりする、と述べている¹⁶⁾。

去粗皮削用或炙或酒浸炙製法頗多当随本方太而皮薄黄色堅実者佳細而堅実者次之軽虚黑色或虵或朽者不可用藥肆称堅鞭者尤良日本固有此草今亦富在只不知之耳（粗皮を去り削って持用いる。炙ったり、酒につけて炙ったりする。）

このように、甘草を酒に浸けるという修治で用いることは、新たな知見であると思われる。この時代（江戸中期）の日本では、生薬の製剤学的研究が発展してきたものと思われる

江戸時代中期の『一本堂薬選』（1729、香川修庵）では、以下のように従来の生と炙の区別を必ずしなければいけないというようなこだわりを持たないで用いるべきである、と述べている。これは、吉益東洞の『薬徴』（1771）に継承されていったと思われる。これは、それまでの本草学を全面的に取り入れられない古方家らしい記述といえよう¹⁷⁾。

撰修 凡撰甘草、取華船貨、来呼為南京甘草、赤皮断文、堅実長道、内色鮮、黄味至甘者为佳、用時、水洗削去外皮剉細勿用粗大有節内色帶黒、或茶褐色、味悪者古人有炙甘草法、自今觀之未見炙補生瀉之実熟故炙不炙不可必別、又有頭尾吐人之説及別用甘草梢、皆後世過鑿之所致、亦不足取、凡用酒湿蒸塗酥炙漿水炙熟長流水懸湿炙熟或炮等制、皆不可用、北邦近年出甘草、唯官国種之世聞未多見也、葉似魁葉、葉端微尖而構洪、亦似紫藤葉而短圓（用いる時は、水で洗い外皮を削り去って細かく刻むこと。粗大であったり節があったり内色が黒く帯びているものや茶褐色のもの、味が悪いものを用いてはいけない。古人の言う甘草を炙る方法は、今から見ると炙が補で、生が実熟を瀉す、ということが見えない。ということではないようである。よって、炙るか炙らないかは必ず区別すべきものではない。）（およそ酒で湿蒸し、酥を塗り、漿水で炙り、熟長流水で炙り、湿炙熟したり、炮じたりする製法は、皆用いてはいけない。）

江戸時代中期の『薬徴』（1771、吉益東洞）では、甘草を生と炙を区別して用いることは仲景の本来の主旨ではないと述べている。このように、古方派らしく従来の修治の概念を否定している¹⁸⁾。

辨誤 東垣李氏曰生用則補脾胃不足而大瀉心火炙之則補三焦元氣而散表寒是仲景所不言也五臟浮節戰国以降今欲為疾医乎則不可言五臟也五臟浮説戰国以降不可從也（生を用いるは脾胃の不足を補って心火を瀉すことであり、炙は三焦の元氣を補い表寒を散らすことである、とは仲景は言っていない。）

吉益東洞は、「自らの臨床経験に基づいた知見（親試実験とよばれている）によってのみ証明されたもの信じること。それまでの医書を妄信してはいけない。」と述べている。このことは、『傷寒論』には基づくが証明されたものだけが信じられるという合理性によるものであろう。

江戸時代後期の『本草綱目啓蒙』（1803、小野蘭山）では、炙甘草における炙ることの重要性について述べている。彼は、香川修庵が『一本堂薬選』（1729）で生も炙るもこだわらないでよいと論述していることに対して、古人の本義を理解して生薬を用いるとするなら修治を考慮すべきである、正している¹⁹⁾

増 修治 炙甘草 古人藥ヲ製スル必ス炙熬生乾或ハ炮炒煨爆煨燻曝露飛伏製度等ノ法ヲ詳ス此皆立方ノ妙吉後人ノ能ク及フ所ニシテ近世香川秀菴翻刻傷寒論凡例云至炙熬等字亦皆一掃止存分兩庶家長所之旨ト今人多ク此説二從フ然レドモ炙熬等ノ文字ヲ刪去シテ古人ノ本音ヲ得ルナラハ炙甘草生薑乾薑ヲモ炙ノ字生乾ノ二字共刪去スベシ然ルニ此等ノ字ハ刪ルコト能ハス且ツ序文云今且依成本不敢加改竄亦存菴之意也トソノ前後矛盾スルコトヲ此ノ如シ古人云壳蓼者兩眼用藥者一眼服藥者無眼香川氏ノ如キハ一眼ニシテ衆人ヲ無眼ニ陥ラシム豈無眼ニシテ病ヲ治スベケンヤ

4. 考 察

考察は、以上の結果をまとめて表2に示し、甘草と炙甘草の修治についての歴史的変遷および展開をした。(表2、図1)

歴代の中国書では、生の甘草は瀉劑であり心火や熱火を瀉す効果があり、炙ることによって補劑となり脾胃の不足を補い強化し上焦中焦下焦の三焦を元気を補うと述べている。日本においても後世派はその概念を踏襲しさらに展開していた。しかし、江戸時代中期の古方派の香

表2 本研究で対象とした本草書における甘草と炙甘草の修治についての論述のまとめ

書名	成立年代	編著者	論述
中国			
神農本草経	BC31 ~ AC220	著者不詳	緩和で様々な治療効果が期待できる生薬であると示唆している。甘草の性状や薬能いて記載されているが、修治の記載はない。
湯液本草	1289	王好古	生で用いる場合と炙って用いる場合の作用の相違を記載している。生の甘草は瀉劑として、炙甘草は補劑として用いられることが記されている。
本草蒙筌	1565	陳嘉謨	生の甘草は寒であり炙甘草は温であるから、生の甘草は火を瀉す作用、炙甘草は中に温める作用がある、と述べている。「生の甘草は瀉劑、炙甘草は補劑」の記述を裏付ける薬能を示唆している。
本草綱目	1578	李時珍	方書では甘草は炙って用いる、と述べている。炙る方法は、「流水で蒸して炙り、漿水を用いて炙って熱する。刻んで赤皮を去る。」と記している。
本草述	1666	劉若金	甘草を炙るといのは、甘温にするためである、と述べている。その甘温の作用が陽の不足を解消する。そのことで、甘草は諸薬を和して中にする、と論じている。修治の項目で「寸径が大きく結緊で横断紋のあるものが良質である」と甘草の品質を記している。炙る方法には、『本草綱目』と同様の前処理が記されている炙ることの意義と甘草含有方剤における炙甘草の存在意義を論述している。
本草蓬原	1695	張璐	生を用いるということは気平にすること、脾虚熱大は心火を瀉すということ、炙るといことは気温にすることで三焦の元気を補し臓腑の寒熱を治し表邪を散らすこと、炙甘草湯が動悸息切れに有効であることなどを記している。炙甘草湯を取り上げて炙甘草が諸薬の作用を調和するという存在意義を論述している。
本草備要	1694	汪昂	補中には炙を用いて、瀉火には生を用いると述べている。生を用いれば気を平にして脾胃の不足を補し心を瀉し、炙を用いれば気温で三焦の元気を補し表寒を散らす、気平、気温、三焦元気など気に対する生あるいは炙甘草がどのような作用があるのか、論述している。
本草從新	1751	吳儀洛	補中は炙を用い大きいものを用いて、瀉火は生を用い細いものを用いると述べ、甘草の大きさで目標が異なるとしている目標とする作用によって甘草の修治の有無や形状を考慮する必要があると述べている。
本草求真	1769	黄宮綉	生の性質は寒で瀉的作用があり、炙の性質は脾を補す作用がある、と記している。そのようなことから、方剤における含有生薬の副作用が生じないようにしている、と述べている。
日本			
薬性能毒	1608	曲直瀬道三、玄朔	その当時の中国の本草書を参考にした記載である。その中で甘草の品質についても述べられている。
和語本草綱目	1716	岡本一抱	李時珍の『本草綱目』の和訳本である。参照すべき箇所を抽出して記述していること、単なる和訳ではなく岡本一抱の意趣が入っている参照すべき箇所を抽出して記述していることは、単なる和訳ではなく岡本一抱の意趣が入っていることを示唆している。
増補片玉六八本草	1723	加藤謙斎	皮を去って炙ったり、あるいは酒に浸けて炙ったりする、と述べているように、甘草を酒に浸けるという修治で用いることは、新たな知見である。
一本堂薬選	1729	香川修庵	従来の生と炙の区別を必ずしなければいけないというようなこだわりを持たないで用いるべきである、と述べている。これは、吉益東洞の『薬徴』に継承されていったと思われる。これは、それまでの本草学を全面的に取り入れえない古方家らしい記述である。
薬徴	1771	吉益東洞	甘草を生と炙を区別して用いることは仲景の本来の主旨ではないと述べている。このように、古方派らしく従来の修治の概念を否定している。
本草綱目啓蒙	1803	小野蘭山	炙甘草における炙ることの重要性について述べている。彼は、香川修庵が『一本堂薬選』で生も炙るもこだわらないでよいと論述していることに対して、古人の本義を理解して生薬を用いるとするなら修治を考慮すべきである、正している。

	甘草	炙甘草
修治	しない	する
五気	平	温
薬能	脾胃の不足を補い 心火を瀉す	・三焦の元気を補い 邪熱を去り 表寒を散らす ・表裏不調和を調和させ 中気不足を緩和し 諸薬を調和する
漢方方剂例	甘草湯	炙甘草

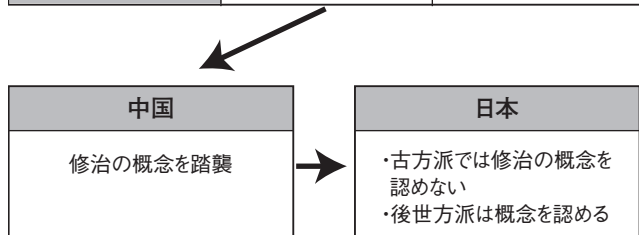


図1 甘草の修治の概念についての本草学書からの考察

川修庵や吉益東洞は、『一本堂薬選』『薬徴』でそのようなことは考慮しなくても良いとした。たとえば、吉益東洞は『医断』で以下のように論述し、後世派が尊重していた修治や本草の概念を否定している¹⁹⁾。

修治 後世修治之法甚煩。如煨炮炒中黑微妙酒浸酢浸九薫曝等興作飯作餅為羹為葢之法何別乎。(後世方の言う修治は、甚だ煩わしい。煨炮炒中黑微妙酒浸酢浸九薫曝等は、飯を作ったり、餅を作ったり、羹としたり葢としたりするのと何ら変わりはない。)

本草 本草妄説甚多。不足以微也。(本草は、妄説が甚だ多い。細かな詳しいところまで研究がなされていない。)

これは、江戸時代中期に勃興した古方派の考え方を如実に示したと思われる。このような古方派の概念に対し、江戸時代後期の小野蘭山は修治の重要性を説いて古方派の行き過ぎを是正している²⁰⁾。

生の甘草のみを含有している甘草湯は『傷寒論』少陰病篇の方剂で、以下のように記されている²⁾。

少陰病二三日咽痛者可興甘草湯不差興桔梗湯 (少陰病に罹患して2～3日後、咽痛があるものには、甘草湯を与えるべし。それで、軽快しなかったら桔梗湯を与えるべし。)

ここでは、咽痛のような火証に対し生甘草を含有している甘草湯のような瀉剂が有用である、と述べられている。そのことは、本研究の『湯液本草』⁶⁾、『本草蒙筌』⁷⁾、『本草綱目』⁸⁾、『本草求真』¹³⁾、『薬性能毒』¹⁴⁾などの本草学的考察から生甘草の瀉火作用によるものであ

る、と思われる。

一方、炙甘草が方剂名に付けられている炙甘草湯は『傷寒論』太陽病の方剂であり、以下のように記されている。²⁾

傷寒解而後脈結代心動悸炙甘草湯主之 (傷寒解した後、脈が結代で、心動悸するものは炙甘草湯これを用いる。)

炙甘草湯は、このように脈結代で心動悸のものに用いられる。炙甘草湯の含有生薬は、炙甘草、生姜、桂皮、麻子仁、大棗、人参、地黄、麦門冬、阿膠である。

『本草蓬原』(1695、張璐)¹¹⁾、『本草求真』(1769、黄宮綉)¹³⁾の論述による考察より、炙甘草が表裏不調和を調和させ中気不足を緩和し諸薬を調和する薬能のあることから、このような方剂が創出されたと推測される。炙るという物理化学的作用による甘草中の化学成分の変化は、考えられる。甘草含有成分の検索については、北川らの報告がなされている。そこでは、液体クロマトグラフィを用いて主にフラボノイドやサポニンの定量分析がなされている。フラボノイドでは、isoliquiritigenin、licoflavon A、licohalocone A、B、glycy coumarin、glycyrin、glycyrol、isoglycyrolがあり、その配糖体としてはliquiritin、liquiritin apioside、neoisoliquiritin ioisoliquiritin、ioisoliquiritin apioside、licurasideの含有が認められた。サポニンでは、glycyrrhizin、licorice-saponin A3、C2、E2、G2、H2、apioglycyrrhizin、arabglycyrrhizinの含有が認められた。ただし、それらの成分の有無や含有比率については由来や産地によって異なることも認められている。また、甘草の修治についても検討されており、炙ることでフラボノイドやサポニンが順次加水分解して糖鎖が除去されていくことが認められている^{20,21)}。そのような糖鎖の除去がどのように薬理作用と関係するのかが明確でないが、今後検討していかなければならない課題である。また、甘草が諸薬を調和する薬能が有するという点については、甘草含有方剂中の甘草と他の含有生薬の化学成分との化学反応についても検討していくことで、解明されると思われる。修治法は、『本草綱目』『本草述』『薬性能毒』『和語本草綱目』『片玉六八本草』の記載のように「祖皮を去って用いる」「流水で蒸して炙る」「酒に浸けて炙る」など種々の方法がある。これらの方法によって化学成分がどのように変化するかを検討することは、興味深い課題である。

岡西為人の『本草概説』では、本草についての歴史的変遷や特徴など多岐にわたって概説があるが、修治も論じられている²³⁾。すなわち、そこでは陶弘景の修治に

関する方法を取り上げている。そして、それには様々な修治法が考え出され踏襲され発展した、と述べられている。また、修治を用いることは常識化されてきたとも、述べている。

今回論述してきたように、甘草と炙甘草は多くの漢方方剤に用いられている生薬であることから、修治を考慮することの必要性は大きいと思える。

5. 結語

本研究は、修治していない甘草と修治している炙甘草の意義について、本草書から考察した。歴代の中国書では、生の甘草は瀉剤であり心火や熱火を瀉す効果があり、炙ることによって補剤となり脾胃の不足を補い強化し上焦中焦下焦の三焦を元気を補うと述べられていた。炙甘草には表裏不調和を調和させ中気不足を緩和し諸薬を調和する薬能のあることも記されていた。日本の江戸時代初期までの後世方の本草書でも、そのような概念が踏襲されている。しかし、江戸時代中期古方派の香川修庵や吉益東洞はそのような修治を否定している。これに対して、江戸時代後期の小野蘭山はこのような行き過ぎを正している。このように、日本では江戸時代中期より甘草と炙甘草の修治について論議されていた。甘草と炙甘草は多くの漢方方剤に用いられている生薬であることから、修治の意義の大きいことが示唆された。

本研究に関して、利益相反はない。

文献

- 1) 厚生労働省：一般用漢方製剤承認基準の改正について。 www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou.../0000092785.pdf.
- 2) 王叔和：傷寒論、200 - 210 成立。台湾中華書局、台北、1960。
- 3) 独立法人 医薬品医療機器総合機構：第十七改正日本薬局方。 <https://www.pmda.go.jp/rs-std-jp/standards.../0013.html>
- 4) 長濱善夫：東洋医学概説、35 - 72、創元社、大阪、1961。
- 5) 著者不詳：神農本草経、BC31-AC220。12 - 13、台湾中華書局、台北、1955。
- 6) 王好古：湯液本草、1289 成立。臨床本草薬理学選集 1、47、オリエント出版、大阪、1995。
- 7) 李時珍：本草綱目、1578 成立。文光園書公司 400 - 402、台北、1960。
- 8) 陳嘉謨：本草蒙筌1565 成立、臨床本草薬理学選集 2、30、オリエント出版、大阪、1995。
- 9) 劉若金：本草述 1666 成立、臨床本草薬理学選集 4、50 - 151、オリエント出版、大阪、1995。
- 10) 張璐：本草逢原 1695 成立、臨床本草薬理学選集 3、60、オリエント出版、大阪、1995。
- 11) 汪昂：本草準要 1694 成立、臨床本草薬理学選集 2、354、オリエント出版、大阪、1995。
- 12) 呉儀洛：本草從新 1751 成立、臨床本草薬理学選集 3、11、オリエント出版、大阪、1995。
- 13) 黄宮綉：本草求真 1769 成立、臨床本草薬理学選集 2、211、オリエント出版、大阪1995。
- 14) 曲直瀬道三、玄朔：薬性能毒 1608 成立、臨床本草薬理学選集 6、138 - 139、オリエント出版、大阪、1995。
- 15) 岡本一抱：和語本草綱目 1716 成立、近世漢方医学書集成 7、170 - 171、名著出版、大阪、1979。
- 16) 加藤謙斎：増補片玉六八本草 1723 成立、臨床本草薬理学選集 6、483、オリエント出版、大阪、1995。
- 17) 香川修庵：一本堂薬選 1729 成立、国立国会図書館デジタルコレクション 3。
- 18) 吉益東洞：薬徴1771 成立、臨床本草薬理学選集7、27 - 39、オリエント出版、大阪、1995。
- 19) 小野蘭山：本草綱目啓蒙1803 成立、国立国会図書館デジタルコレクション 3 - 4。
- 20) 吉益東洞：医断1959 成立、国立国会図書館デジタルコレクション 15 - 16。
- 21) 北川勲、陳偉衆、谷山登志男、原田英美子、堀一之、小林資正、任家礼：各種甘草含有成分のHPLCによる定量分析。薬学雑誌、118 (11)、519 - 528、1998。
- 22) 桑島博、種田裕喜子、陳偉衆、川西聡政、堀一之、谷山登志男、小林資正、任家礼、北川勲：甘草修治における成分変化：皮去り甘草と炙甘草中のサポニン及びフラボノイド成分の定量分析。薬学雑誌、119 (12)、945 - 953、1999。
- 23) 岡西為人：本草概説。289 - 292、創元社、大阪、1977。

Review Articles

Shuchi of Glycyrrhiza and Prepared Glycyrrhiza: Studies on Phytological Books

Shizuo Toda

Faculty of Health Sciences in Kansai University of Health Sciences

Abstract

Glycyrrhiza and Prepared Glycyrrhiza contained in many herbal medicines as oriental drugs. The 17th Japanese Pharmacopoeia shows that Glycyrrhiza is the root and stolon, with (unpeeled) or without (peeled) the periderm, of *Glycyrrhiza uralensis* Fisher or *Glycyrrhiza glabra* Linne (Leguminosae), and that Prepared Glycyrrhiza is prepared by roasting Glycyrrhiza. Glycyrrhiza contained in *Kanzotou* and *Kikyoutou*, but Prepared Glycyrrhiza were used in other many herbal medicines described in “*Shokanron*” as a classical and fundamental medicinal book. It is important to research the differences of qualities and activities between Glycyrrhiza and Prepared Glycyrrhiza.

This research was investigated on Glycyrrhiza and Prepared Glycyrrhiza as the oriental crude drugs by using Chinese and Japanese phytological books. Chinese phytological books showed that Glycyrrhiza has been used as a *shazai* and has the activities to remove *shinka* and *netuka*, and that Prepared Glycyrrhiza has supplied the deficiencies of spleen and stomach-qi and strengthened *sansho* as a *hozai*. In Japan, *Goseihouha* – doctors had been followed on such Chinese findings until Japanese early Edo era. However, *Shuan Kagawa* and *Toudou Yoshimasu* as *Kohouha* - doctors in Japanese middle Edo era demonstrated that those theories were wrong, and that the preparation like *shuchi* were not necessary. *Ono Ranzann* objected such demonstrations in Japanese latter Edo era. *Shuchi* of Glycyrrhiza and Prepared Glycyrrhiza has been discussed from Japanese middle Edo era. This study demonstrated that it is necessary to research the preparation of the crude drugs because Glycyrrhiza and Prepared Glycyrrhiza has been used in many herbal medicines.

Keyword : Glycyrrhiza, Prepared Glycyrrhiza, Shuchi, Phytological book
